**幸田真音『大暴落　ガラ』第３章　暗躍者　♯１４８**

田崎もなつきも、直前まであんなに激しくやりあっていたのだ。それなのに、そんなことなど完全に忘れたかのように、信じられないぐらいけろりとして、満面に笑みを浮かべている。

　それはたしかに閣僚としての礼儀であり、内閣を率いる総理大臣三崎皓子へのリスペクトでもあるのだろう。あるいは、自分が成熟した円満な人間であることの周囲へのアピールであるのかもしれない。

　ただ、わざとらしいまでの笑顔で平然と握手を求められると、皓子はいつもなんだか偽善的な臭いを感じ、複雑な思いに駆られてしまう。

　まだ、なにも進展しておらず、問題は依然として積み残したままだ。なのにこんなふうに笑って済ますつもりか。

　口許まで出かかったそんな言葉を無理にも呑み下して、皓子もやはり笑顔で握手に応じるしかなかった。

　ともかく、白熱した議論の閣議室を出て、エレベータを降りてみると、官邸の正面出口に向かうフロアは、すっかり夜も更けて静まり返っていた。

　ただ一箇所、正面玄関に向かって右の出口に向かう一角だけが、テレビカメラによる明るすぎるほどのライトに照らされて、待ち受けている番記者たちの集団を浮かび上がらせている。

　皓子が、秘書官や警護のＳＰたちに囲まれてそこを通過するとき、番記者から次々と質問が飛んだ。  
「総理、閣議はいかがでしたか？」  
「どういった内容だったのでしょうか？」  
「総理、一言、なにかお願いできませんか？」  
　番記者たちのなかには、以前から親交のあるテレビ・ジャパンの秋本つかさの顔もあった。そういえば、しばらく顔を見かけなかったが、また官邸担当に戻ってきたのだろう。周囲の記者たちに気づかれないよう皓子に視線を合わせてきて、軽く会釈をしてきたが、皓子はその質問にもにこやかな顔を向けるだけで、あえて答えることはしなかった。

[**＞＞第３章　暗躍者　♯１４９へ**](http://www.yomiuri.co.jp/life/special/kouda/20160606-OYT8T50057.html)